
異世界の狐

ままま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界の狐

【Nコード】

N83970

【作者名】

ままま

【あらすじ】

ごくありふれた勇者とごくありふれた勇者の仲間達。異世界より呼ばされた勇者だが、驚くことに魔王は存在せず、肝心の勇者の義務とはまるで僧侶。そんな勇者……の仲間のごくありふれた厨二病型異世界召喚ファンタジーの物語。

異世界にロケインしました(前書き)

この物語は『おれのかんがえたいこの世かい』という厨二病と趣味が炸裂して出来た物です。まず最初に言うべきこととして

(勇者が)ハーレム

(勇者が)チート

主人公は勇者ではなく旅の仲間の一人

どこかで見たこと、聞いたことあるような固有名詞や人物像

突然の固有名詞

があります。固有名詞に関しては物語中に語るようにします、恐らく話の中に出てきた後に内容を語ることになると思いますが…。細げえこたあ！の精神が必要な場面が多々在るかもしれません。

異世界にロケインしました

異世界という存在がある。それは本当に異なるという意味の異世界なのか、はたまた平行……、可能性の中にあり分岐された異世界なのか、それは定かではない。ただ言えることは、異世界という名前の通り”異なる”世界だ、自分が住んでいない世界、自分が知らない世界、もしかしたら自分が望んだ世界かもしれない。ただ最初と言わなくてはいけないことがあったが、それが”本当”に存在するか否か、ということだ。現に誰も見たこと無いし存在すると証明されたわけでもない。その上誰も見たことがないということも、本当に存在しないと証明出来たものもない。

「想像出来ることは現実に起きうる。」

と言ったものがいたが……さて、それは”本当”なのだろうか。思えばあなたがちそれも間違っではない。よくある話だが、人々が認識したからこそ存在する、というなんとも不思議な理論……”観念論”がある。石器の槍を手に持ち、オーオーオツオツオツ、とそれっぽい歌を歌いながらピョンピョン飛び跳ねる古代の者たちに宇宙の存在を教えたところで理解出来るはずもないだろう。なんせ、古代の者達は宇宙を”観測”したことがないのだから。宇宙の概念を、存在を、真理を、わかるものなどいない、決していない。ならば、当時には宇宙など存在していないことに等しいのでないだろうか。例え存在していようが、存在していて”何らかの何か”に成りうるだろうか。そこで問題なのが、意味のないことは存在する必要が無い、という話に繋がるのだが……、それはまさしく無駄なことであろう。必要あるのか、無いのかは個人が決めることだ。別の誰

かが決めることではないし、己が必要と思う存在が別の存在に否定などされて堪るもの、か……。さて、観念論の中でも”観測して存在する”というもの、それは存在論という話だが…イデアやらなんやらと小難しい話である。物事において、全てには本質的^{イデア}が存在し、我々人間が見ている存在はただの影……本質的な物を人間という観測者が見える形で投影されたもの、という。ただ、そんなことを言ってしまうばわかるかもしれないが……本質というのは無限に存在することになるのだ。人間一人を観測するにしても、それが男か女か、どここの出身か、年齢、性格、ありとあらゆる側面を持ち、無論その一つ一つに本質が存在する。ああ、なんとも無駄なことであるうか、考えれば考えるほどそれは無限大に広がるのだ。まさしく…可能性という石にぶつかった時、枝別れを始める平行世界の根……

そう異世界のように。

「東の方、本日も晴天なり、つてねい。」

時刻は暁、地平線の向こうからまだ見ぬ太陽の光が漏れ始めた時刻である。太陽が昇る東の果てをどこぞの建物の屋根に座りブラブラと足をさせながらゆったりと眺める彼がいた。明るく霞んでいく闇夜を侵食でもするかのように徐々に、次第に、その光景は何度見ようとも”飽きる”ことなど決してないだろう。彼はその日、特にこ

機嫌だった。人間には決して存在しない”耳”をピクピク動かし、まるで主人を出むかえる犬のように”尻尾”をフサフサ…、まあ普通の人間じゃないことは確かである。

「ふんふーん、ふふん。」

愉快そうに鼻歌を歌いながら、ゴソゴソと懐から何かを取り出す。細長く黄色、彼は器用にもその何かの黄色い皮を放射線状に剥いて露わになった実を一口かじる。うまい、と果実をモニヨモニヨ言わせながら食べるのであった。

「んー、なんていったかなあ、この南の果実は…、ぜってえ果物じやねーよコレ。」

果物と言えれば何を思い出すだろうか。赤くたわわに実った悪魔の果実、林檎か。はたまた梨、葡萄かもしれない。しかし総じてそれらには統一性があるのはわかるだろう。みずみずしさ、果実としての甘い汁、全部がそうだ。しかしその黄色い果実にはまったく無い。むしろ喉が渴く勢いだと彼は、美味しいという感情と同様にも思う。噛めば噛むほど、というか噛む必要がないほど”ネッチヨリモチヨモチヨ”しているその果実は…世の中不思議なものだなあ、と彼は思う。太陽が地平線の彼方から出てくるのをボンヤリと眺め、太陽の光が細長い果物を照らす。

「しちそーさまー！つと。んー、いらね。」

些か満足はしたが、残った皮が邪魔である。彼はだらしなく左手より垂れ下がる黄色い皮を見ては、そう思いそのままポイツと放り投げた。下がどうなるうが、まあ気にすることもないだろう。食べる物も食べ終え、特にすることがなくなった彼は背を伸ばす。コキンと鳴らし、その心地よさの余韻に浸る。一息終えた後のコレはいつの時代でも格別なことなのであろう。

カラア ……………ン

カラア ……………ン

カラア ……………ン

「あらま、最近お日さんが速いねい。」

彼が辺りを見下ろした。三百六十度街である。建物が並び、早朝とはいえ店を構えるものや速く動こうとする冒険者達が疎らに歩き回る様子がわかるが…まだ早朝だ。人が行動するにはまだ早かった。だが、本日もその”大鐘楼”は響き渡る。座っていた彼が振り向くと、後方には城があった。優雅讚美を極める匠の造形でありながら、いざ戦闘が起こると無類の頑丈さを誇る要塞、城の最上部につけられた白銀に輝く大鐘楼が太陽の光を反射し始めていた。彼が微かに

残る鐘の音を楽しんでいる合間に、街の通りに次第に人々の姿が現れる。普通の住民のように、何の変哲も無い服装をするものもいれば、魔物を被つて手に入れた素材を使った軽そうな鎧をつけた戦士、ローブを被つた魔導師もいれば、なんと全身毛むくじやらの人もいた。

「ま、行きますかねい、つと。」

ピヨンと彼は、座っていた屋根から降りる。飛び降りた先にもまた建物の屋根が見えるが、彼は着地の音を少しも立てずに屋根に着地し、勢いをそのままに駆けだした。屋根から屋根へと身を移し、今の彼には遮る存在は無い。タンツ、と大きく跳躍したかと思えば、彼が出た先には大きな通りが見えた。まだご機嫌が良いのか、金色に輝く尻尾を忙しく動かしながら、財布の中身を確認し彼は歩き出した。

『中心国家ミドルアーク』

彼がゆっくりと散策しているところには既に太陽も大きく自己主張を始め、通りには様々な人々で賑わっていた。料理の材料でも買いに来たのか、主婦らしき女性が店主と色々言い合い、冒険者達が互いに己が仕入れた情報を交換し合う小さな井戸端会議。子供達が、見ているだけで疲れるぐらいの元気っぷりを見せ付けながら走り去る姿も、ガタイの良い男達が歩き回る姿もいつも通りだ。彼が歩く通

りは、その都市国家最大の通りである。さすがと言うべきか、様々な国を探してもここまで広く人の多い通りはないだろう。フリフリ尻尾を揺らしながら通りの真ん中を歩く彼だが、特にその日も何事も無く終わるのだろう、そう思いながら歩いていたせいか、ざわざわ、と不自然にも人々が集まっている広場には少しばかり驚くものがあつた。なんだろう、と彼が歩み寄る、が…人が多くて何がなんだかよくわからない。頭の上方についた金毛がはえた三角形の耳を澄ませば、どうにも国からの知らせが掲示板に張り付けられたらしい。

「見えねえ、見えないよー！」

ピョンピョン跳びはねるが、彼の身長は大の大人の半分程度。ぶつちやけ子供サイズの彼だったのだ。その大の大人が寄つてたかった我こそはと見ようとするその”お知らせ”が見えるわけもなく、ただのイラツキを積もらせるだけに終わる。埒が空かない、と彼は速攻に見ることを諦め　もう既にどうでもよくなつてきているが　とつくにその”お知らせ”を見たと思われる集団に素直に聞くことにした。

「ねね、おねーさん達ちよつといい？」

「あらぼーや、こんな朝早くからお誘い？ぼーや可愛いからなんでも言っつていいわよ、フフ。」

「んー？」

「……なんでもないわ、どうしたの？」

彼はちよつと言っていることワカンナイナー、ばかりにコテンと頭を傾げた。彼が聞いた集団の一番偉そうな、というか一番強そうな女性に聞いたのだが、ちよつと勘違いが起きたらしい。周りを見渡せば、みんな女性。中にはウサギの耳のように頭にピンツと細長い耳を生やした者もいる。女性達は彼の姿を見ては、キヤーキヤー言い、コテンと首をかかげればまたキヤーキヤー言う。なんとというか、彼はわかると思うが一応、性別上は男である。だがまだ少年らしく中性的な顔である上、妙に保護心に訴えかけるフルフルと揺れる尻尾、ああコレはダメだな、と言わずにも伝わるだろう。ゴホン、と咳払いをし仕切り直す女性に彼は聞いた。

「あれって何の集まりなの？」

「あー、あれね、… はー、まさか自分がこんな日に立ち会うとは思いもしなかったけど…、」

勇者、だつてさ。

「…勇者？」

そそ、と女性は答える。内面では、再びコテンと首をかかげた彼に顔を赤面しながらも耐える女性であったが、さすがは歴戦の冒険者なのだろう、見れば平常運転にしか見えない。竜の牙で作られた首

飾りに身につけ、背負われた大剣は一目見るだけで極上品だとわかるほどのオーラを出していた、が今はどうでもいいだろう。

「前からもう500年らしいさ、それでね、なんでも勇者のお供を募集しているのさ。残念だけど私は無理だねー、クエストもあるし。」

「そっか、ありがと！おねーさん大好き！」

「え、ちょーはわわわー!!」

満面の笑みで女性に抱きつく彼である、なんかもう色々と終わってるような気がしないでもない。女性は背後から消えてくる「ずるい」だの「次私ね」だの、片っ端から無視し色々と楽しむことにしたが、さあ行こう、と思えば彼は女性から身を離す。内心では残念極まりないと思うものの、クールを目標とする女性率いる”パーティー”だ、そこは淑女らしく我慢するという。

「ばいばーい、またねー、おねーさん。」

「またねーばーや、いつでも待つてるわ〜。」

手を振りながら去っていく彼を見ながら、彼氏欲しい、とブツブツ言い出した女性を慰めるパーティーの一員の女性達。なんとも不思議な世の中である。さて、彼のほうから見ると、常に感じていた”危険”な視線から即刻にでも逃げ出したかったのである、まあすぐに

逃げる事が出来、何事も無かったので問題は無かったという。

「ククク、マジちよれーなあおい！俺様ってばマジ罪造りだねん。」

そして、これは言う必要も無いだろうが、女性に抱きついたときにシッポリと女性の豊満な胸と尻の触り心地を楽しんでいたのである。計画通り！とどこかの新世界の神のような顔をしていた。ハッハッハ、と高笑いをしながら彼は人が通らないような裏通りを一人で歩いていた。んー、もうちよっと揉んでおけば、と一人でブツブツ言うものの誰一人ともそれを聞くものはいない。

「げにやげに勇者ない、…まあ関わることもないか。」

やれやれ、と彼は顎に当てたまま歩くの止めない。”勇者”と言われてもなかなかパツとしない、というのが彼の正直な心情である。例え伝統だとしてもアレからもう5000年も立つのだ、と彼は思う。未だに続く、偉い人から言わせれば”古き良き習慣”を続けるのもどのようなものか、偉い人の考えが訳解らず、彼はため息を吐かずにはいらなかった。なんせ…

もう魔王は存在しないのだ。

5000年前、最初の勇者が魔王を打ち倒し、その後魔王は一回も復活どころかその兆しすら見せたことがない。例え500年に一度、

勇者の素質を持つものを半ば”強制的”に召喚し、そしてこの”幻想世界”各地に巡礼させる意味がわからない、と彼は思う。偉い人が言うには、国家間の連携の向上、そして二言目には復活するかもしれない魔王への対策と民衆の意識。偉い人にはわかり、自分にはわからないことだろうと彼は無理矢理に自分を納得させた。

「フン、呼び出される方は堪ったもんじゃねーや。」

と、彼は文句を言うがそんな状況は一向に変わらない。なぜならば彼のこういう意見はその世界では少数派に当たるからだ。というのも5000年の出来事以後”偉い人”達は何を考えたのか、そういう教育を施すようになった。5000年前と比べ技術 現代で言うと科学技術を指す は余り変わらないものの…、その分と云うべきか、精度の高い教育環境が整うようになり精神的な成長に関しては大いに進歩した。冒険者を支援するいわゆる”ギルド”が発足し冒険者達の能力も上昇、中には『職業』^{クラス}別の教育機関まであるほどだ。その中において、彼らは決まり文句のようにこう言う、勇者に選ばれるのは名誉なこと、5000年の伝統、と。そういうわけで彼のような思考は特に少数派になったわけである。

「（実害があるわけじゃねーけど、後継以外の”神具”が目覚めたんだ……、きな臭いったらありやしなないもんさね。）」

かつて勇者とその仲間達9人が魔王との決戦において使用した強力無比な武器”神具”は、武器として用いれば万の軍勢を打ち払い、防具として用いれば万の災害から身を守ると言われる最高峰の存在

である。5000年たった現在においてはその半分ほどが行方不明になっていくが……、言い換えればもう半分確実に存在する。勇者が巡礼する場所に奉られているのもあれば、神殿や遺跡の奥深くに封印してあるものもあるというが……。

「勇者つてばマジ面倒くせえ。」

彼は右手で腰に括り付けられた小さな白銀色に輝く金槌を撫で、左手で紫色の瓢箪を呷る。頭を冷やすようにコクリと一口水を飲めば、彼は頭を振って今までの思考を無かったことにした。やれやれ、と彼は暗い通路を歩き出す。先程までとは違ってかわってご機嫌に振られていた尻尾は、力なく垂れ下がっているだけであった。

運命の歯車が回り始めた、とは実に言い難いものだ。あえて言うならば、賽は振られた、と言ったほうがいいかもしれない。そもそも運命とは存在しないと断言しよう。これは運命だ、とよく物語で語られるが……。実際にはそれは滑稽だ。もっともそれを否定する気はないが些か烏滸がましいのではないだろうか。ただが運命ごときで、自らが歩いた道が否定されてたまるもの、か……。運命を信じぬ者に運命を説いた所で何の価値観の変化も変わらない。運命とは、初

めてそれを「ああ、これは運命だ」と結論づけたとき、人々がそういう存在として認識して初めて運命は存在する、まさしく観念論の話だ。運命とは実に不明確で、……甘美溢れるもつたいない言葉である。

「どこどこ？……ぜってえ日本じゃ……現実でもねーよ。」

「ふえ？……ここはミドルアークの城なのですよ？もしかして知らないのですか？」

勇者様？

『勇者ガ異世界ニログインシマシタ』

勇者、異世界を知る

「わ、わわわ、私の名前はわわわっ〜!」

「姫様頑張つて!もう少しです!」

「(何がなんだかわからない。)」

理解出来ねエ……、と勇者はその回数目の疑問を思う。勇者はいつも通り学校へ行こうと家を出発すると、何故かドボンッ、とまるで池に落ちるような感覚に飲み込まれ、気付いたらここにいたというワケのワカラナイ状態であった。

夢か幻か、例に頬を引っ張つても痛覚は寝ぼけていないみたいだ。というか、もし夢だとしたら自分は一体どういう精神構造をしているのか非常に気になるところだ。

「わわわ、わわ、ええええ『エルリア・センペレイオー・ククルケル・ミドルアーク』といいますのでひゅ!ひゃッ!?!」

「ああ、どうもッス。」

あ、可愛い、と思うがまず服装が奇抜である。どこかの漫画の登場人物、先程隣にいる騎士甲冑を着込んだ女性が仰るとおりまさしく”お姫様”っぽい。白を基調とし、金と桃色のアクセントでごちゃごちゃしており、現実には存在せぬ地面にまで伸びようかという金色のツインテール、まじパネエ、と勇者が愚痴るのも無理は無い。

というか名前らしき物を長いが一息で言い切るといふことに驚きだった。顔を真っ赤にして一体何をやっているのだろうか、今のところ勇者には当然理解の出来ないことであった。そもそも、今一番勇者が気にしていることは、このツインテールのお姫様の名前より、控える頭に翼っぽいのが映えていてどうみても人間じゃない青色ポニーテールの騎士の正体より…、

「（まずここはどこなんでせうか。）」

「ゴホン、私の名前は『クリステイアーネ・D・ヘカティ』です”勇者”殿、”勇者”殿のお名前をお聞きしても？」

「”勇者”ってなんだよ夢なら覚めてくれヨー。」

「わわ！どうなさったのですか”勇者”様!？」

ここは楽しむべきか、それともやはり夢だから早く覚めるべきか、勇者勇者連呼されても当然わからない”勇者”だが…、とりあえず聞こう、と思い立った”勇者”は立ち上がることにした。

一向に覚める気配が無い夢だが、もしかしたら、という可能性も否めない。厨二病の季節は終わったんだけどなー、と勇者は思うものの、彼の小さな脳味噌が生み出す”結果”はどうみても”ソレ”であった。

「あー、俺の名前は『ヤマト・タケル大和武』っていうんだけど。」

「ヤマトタケル？変わったお名前ですね。どこの部族ですか？」

騎士がクスクス笑いながら返す。騎士には悪意は微塵も無いようだが、自分の名前を笑われるとは思いもしなかった、と勇者は思う。逆に”名前がおかしい”と言われることで自分が今までいた場所とは違うということが大いにわかるものだ。

ただ、何故”日本語”が通じるのかサツパリ不明だが、勇者は召喚された不思議パワーでなんとかなるもんだなあ、としみじみと思った。

そう思いながら勇者は己の名前がタケルで性がヤマトであることを仄めかすと、名前を笑うという行為をしでしかたために王女からの折檻を喰らっている騎士が猛烈な勢いで謝ってくる。

「このど阿呆！」

「あー？ももも、もー！うっ！し訳ございませんでしたー！」

ああ、これがいつも通りなんだなあと勇者は感じ取る。

「あー、ちょっと聞きたいことがあるんだ……ですけど、いいですか？」

「まあ！？勇者様がワタクシに敬語ですとう！？ええ、なんでもお聞きになって下さいませい！！」

テンション高えなこのツインテ、と思いながらも勇者は続ける。

「じじじじじ。」

「……み、ミドルアークですけど勇者様？もしかしてワタクシの名前聞いてませんでしたか？」

「いや、そついうことじゃなくて……あのさ、」

「はい。」

俺ミドルアークなんて国知らないんだけど。

「ふえ？」

「ハハハ、ご冗談を。」

勇者は騎士の乾いた笑いに若干苛立ちを覚える、が真実なものは真実であり信じてもらわないと困る。なんせ彼が先程までいた国の名前は”日本”であり現実であつたからだ。

そもそも一般市民であつた勇者が王女つばい人と交流出来る機会があるはずもなく何より、頭部に翼のような突起が生えており、スカート状に広がる鎧からウネウネしている尻尾つばいものを持つ”人間”はいない。

その騎士の格好はまさしく騎士、本物の鉄で構成された甲冑を着込む人間なんざ、決してとは言えないがいるはずがない。

ようするに勇者サイドの現実としてはありえない状況であるのだ。

「ニホン？どこの国ですか？クリステイ知ってますか？」

「いえ、一応教養も嗜んだ身ですが…そのような国は。」

「……じゃどこから来たのですか、ってそのニホンとやら？でした
ね。」

「あ、ああ。ちなみに俺の国では翼を頭から生やした人はいないし

」

勇者は騎士の頭部をジロジロ見ながら続ける。

「ミドルアークなんて国も”無い”し、そもそも俺ただの一般市民」

「ミドルアークを知らないド田舎から……の可能性は無いですね」

「こんな服装見たことありませんね、真っ黒ってどういう趣味か疑
いたくなりますけど生地は上等、すぎますねコレは。しかし亜人を
見たこと無いとは…これまた奇怪な。」

「さらっとひどいこと言ったね君い！？正装の一つですから拒否権
なんて無いんですー！！ていうか亜人とか、それなんてエ……異世
界？」

「異世界？」「異世界？」

なんだコイツラ、と何度目かの疑問を勇者は思った。考えれば考えるほど自分の立場が不明な勇者（仮）から見れば、そういうフィクションが溢れている現実出身のこともあり、その答えに辿り着くのは容易なことであつただろう。

ただし、それは勇者に限つた話で目の前の金ツインテール王女と青ポニーテール騎士は例外なの言うまでもない。

王女と騎士の台詞が見事に被つたことに若干怯みながらも勇者は「そう」と答えながら、たどたどしく説明を始めた。

「魔法が無い、ですか。」

「ついでに私のような亜人、獣人もいない、と。まあそれは変なモガツ!？」

「あはははー、申し訳ないのです勇者様。このアホ騎士はまた、オホホホ。」

日本という国、政治の仕組みから簡単に始まり 勇者がただの学生なため知識は偏っているが 己がどういう存在なのか、説明はしたものの勇者は信じてもらえとは思っていなかった。

なんせ『アナザー・ワールド異世界』だ、さすがにそういう概念はこの世界にもあつた

ようだが、その異世界とは神々や精霊、はたまた最上位悪魔といった高位存在がウジャウジャしている世界だという。まさしくファンタジーだぜ、と勇者は頼もとをヒクヒクさせながら呟いた。しかしその次には勇者は驚くことなる。

「信じるのです。」

「信じますよ。」

「ああ、ハイ……。」

これだ、この何でも勇者様なら！っていう空気に勇者は驚くことしか出来なかった。さすがにコレはねーだろい、と思うがそれを王女達に言ったところで理解も出来ないだろう。

「これなんてテンプレ?」

「テンプレ?」

「北東の一部の郷土料理にそれらしいものがあったかと。」

「あるのかよ……ああ、なんでもないツス……あのさ。」

「なんでもお答えするのです勇者様!」

一番肝心な所とはここがどこなのかだが、一番重要な所はそうじゃ

ない。勇者がそれを聞こうとすると犬のごとく　どこぞの誰かの
ように尻尾があればブンブン振り回しているだろう　構える王女。

「俺を還すことって」

「無理ですね。」

少しは戸惑えよ、と勇者が頭を抱える。速攻でお答えされるという
非常事態だ、というか王女に聞いて騎士から答えが返ってくるかと
どうよ、と勇者は思う。

無論、王女はそんな騎士にブンブン怒っているが身長の関係で軽く
遊ばれているという。

召喚されて二人に感じたのが、見事な主従、という言葉だったが今
見ると仲の良い姉妹にしか見えない。

「……そう、か。いや予想はしてたんだけどさ、ハハハ」

「でも、還す方法があるかもしれないのです。」

「（ああ、これまた……）」

勇者とは一体なんなのか、王女の話はそこから始まった。

『勇者システム』

その起源は5000年前まで遡る。当時世界はテンプレのごとく闇に包まれて”いたという”。あらゆる地域に適応し生きている生き物、その中でも特に人々に敵対する者達を魔物と言い、それらを統括していたのが魔王だと言われている。

5000年前、魔物率いる魔王を倒すべく世界各地の歴戦の戦士達、そして皆の希望を集め召喚された勇者。

単行本にすると20巻分程度の冒険を経て、彼らは魔王と戦いそして勝った。魔王への道において”超絶的に強い”魔王を倒す力を持つ武器『神具』ファンタズムを手に入れた勇者達はなんとか魔王を討伐。そして勇者はどこかへ消えていったらしい。

「その勇者はどこに…?」

「そこがポイント、なのです！定説には初代勇者は故郷へ帰った、と言われているのです。もしかしたら勇者様……タケル様も同じように。」

「なるほど、勇者ね。」

それ以後、国々は復活する”かもしれない”魔王に対する策として、皮肉なことだが団結し、勇者システムを作り出したのである。

「なんで5000年に一度なの?」

「んー、お父様の話によると希望が集まりきるのが500年だと…。」

「胡散臭モガツ!？」

「クリステイは黙っているのです!」

なるほど、この騎士は余計なことを自然に言うタイプか、と勇者は理解した。しかしそれでも、この王女は騎士を側に置いている。かなりの信頼関係を気付いているのだろうと勇者は思った。

魔王が存在したことを忘れないように、500年に一度勇者を呼ぶことでいつまでも国家間の連携を保てるようにするという話だそうだ。勇者はここで疑問を覚える、じゃ勇者である自分は何をすればいいのか、と。

「各地の巡礼をするのです。」

「世界各地の巡礼地……簡単に言うと聖域や神殿ですね。そこを周り巡ることで勇者の力が各地の魔力溜まりを刺激、そして流れがよくなるのかならないとか。」

「……世界各地?」

そうなのです、とさつきからDEATHデス言っている王女だが、勇者は話の一部を思い出す。ここはいわゆる剣と魔法の世界である、剣と魔法を振るう相手、魔物が存在するのだ。先程から一般人をアピールしている勇者にとって、無茶Don't sayであるのは

言うまでもない。

魔力溜まりとかよくわからないことは放っておく、どうせ自分は巡るだけだし、と勇者はそれらに関しては何とまず置いておき、危険性について尋ねた。

「まあ突然勇者として放り投げたら死にますね、108回ぐらい。」

「なん……だとッ……!？」

「そこで!かつての勇者様と同じように”お供”がついてくるのです!どのお供も最高級で各地の国家、自治区の支援付き!冒険者達から見ればギルドに逆立ちしながらでも頼みたくなるほどの大サービスなのです!」

「ギルド……?」

さつきから聞いてばかりで申し訳ない、そんな表情の勇者に気付いてか王女は微笑みながら答えた。

冒険者、それは勇者よりも歴史が古い存在である。各地のモンスター討伐を主旨とするハンターや、素材を集めるために冒険するトリーダーなど色々分類されるが総じて”冒険する者”であるのはわかるだろう。

しかし勿論命を落とす危険がある。だからこそ設立されたのが『冒険者統轄機関』だ。

管理する、とは烏滸がましいものだが個人情報を押さえることで本人の実力にあつたクエストや、各地のギルドの支部にて冒険者達の支援を行うことが出来る。

その結果として冒険者の死亡率は未だに高いとはいえ下がったので

ある。

「なんとというか、予想通りだな。」

「さすがなのです勇者様！」

「いやあ、突然わけのわからないことを言うかと思っただけ以外とやりモガツ!？」

「ハハハ……おお、すげえ。」

後に騎士が控える形で城の中を歩いていたのだが、勇者がフト目に入ったのはただの光景だった。都市国家ミドルアークの中心に位置し、それなりに高く築かれている城からの光景とはまさしく絶景だろう。思わず声が漏れた勇者に微笑みながら王女は言う。

「我が祖国ミドルアークなのです、城を中心に円状に気付かれた鉄壁を誇る城壁の中にスツポリと街が入っているのですよ。」

「なんとというか、……すごい。」

己の語彙の少なさに若干呆れながらも勇者はその光景に息を飲んだ。見渡す限りがファンタジー全開な建物である。空を飛ぶドラゴンっぽい。ただの翼付きトカゲ程度であろうが。ものから、見える大通りには馬車は勿論のこと、人間とは思えないような格好をしているものやら象ほど大きい生き物が荷物を運んでいる。

「城を中心にして街を十字に切る形に作られた人々の行動範囲の中心とも言える大通りなのです、一番大きいのは正面に見える南ですね、特に名称は無いですが北とか南とかで十分伝わるのです！」

「昔は姫様も東の屋台通モガツ!？」

「じゃあー!? 黙るのです！」

その言葉にあーすごい庶民的ですねー、とつい淡々と答えてしまった勇者である。きつと遊ぶときは北の飴屋でな!とかで十分なのだろう。騎士の言葉は聞こえなかったことにした。そこは果物屋とかにしとけよ!とか絶対に思ったりもしない。

「とじろでね。」

「はいなんでしよう!」

「今どこに向かっているの?」

「お供達と顔を合わせるのです!………異世界云々はどうしましょ。」

「こつちが聞きてえーよ姫様。」

姫様と呼ぶなんてとんでもない、と王女は言う。しかし相手は間違いないく敬意を払うべき存在であるため、一市民としての勇者には酷

な話であろう。言い合ったりして数分後にようやく名前前で呼ぶことにしたのだが…

「まあ異世界云々は……記憶喪失とかどうでしょうか？タケル様。」

「あ、ああじゃそれで行こう。名前だけなんとか覚えていた的な、それでいいよねエルリア様……エルリア。」

「はいなのです！」

「さすがです姫様、無茶なことばかモガツ！？」

そして相変わらず騎士はうざかった。うざい騎士を見てお供と会うということを出した勇者は、これからどうしようかなあ、と思うのであった。

それはともかく、王女についていくように歩くと勇者は広場みたいな場所に出る。

「あの人達がお供、か……。」

広場に立っている二人の人影。おかしいなあ、と目を擦った。なんせ二人とも人間じゃないっぽいからだ。特に片方は顕著にそれが顕れている。耳が長いのはエルフとかその辺りだろうと勇者は思うものの、肌が暗蒼色だ。すげえ、と思いながら自分の頬を抓る。

もう片方は黒白い、格好が真っ白で黒かった。というか隣にいる王女よりも”姫”っぽい白いドレスに黒く長い髪の毛、目がウサギの

ように真っ赤である。

若干違和感を覚えた勇者だが、その正体はわからない。特に気にする必要もないだろうとお供とやらに再び目を向けた。

「（すっげー美女、さすが異世界。）」

「そして私とクリスティも一緒なのです！合計4人のお供ですよ！」

「姫様は役に立たなモガツ!？」

まずそこからおかしい、とあまりの出来事に勇者は口に出すことは出来なかった。お供として選ばれているのだから目の前の二人の女性はそのなりに強いのである。そして騎士であるクリスティアーネも言う必要は無い。

王女がついてくるなんて聞いてない、なにそれこわい、と勇者が王女の参加をそれとなく断ろうとしたのだが、まあ勇者も男である。上目涙目で頼まれたら断る奴なんてどこぞの歩く変態兵器しかない。

そして何より

「（なんて男1人に対して女4人なのだろうか、創作ならまだしもこれは現実……俺に女性と愉快に過ごせるようスキルがあるとでも
……否ッッ!）」

「暗器使い……………ジーニアス。」

ああはい、心の中で呟く。彼女の名前はジーニアスっていうのかー、と勇者は心で呟く。暗蒼色の肌にエルフっぽい耳に腰辺りで一纏めにされた銀色の髪、スラツとした体型である。胸は美乳タイプだな、と勇者の無駄スキルが発動したのはどうでもいよい。

「魔導師、マニラ・インレテスよ。ふうん、よかったわ勇者がおっさんじゃなくて、クスクス。」

黒く真つ白な女性も続いた。オツサンて…そりや絶対に嫌だな、と勇者も魔女に同感した。黒く艶のある髪の毛だが、真つ白なドレスに赤い眼とは、最高の組み合わせだな、と勇者は思った、絶対に口には出さないが。あと胸は”無い”。もう背中との区別すらできない可能性があるかもしれない。ついでに言うのなら魔女も人間ではないだろう、背中には小さな悪魔っぽい翼が生えていた。

「あ、ああ俺の名前はタケルといいます。コンゴトモヨロシクオネガイシマス。」

旅が始まるうとする。来訪せし勇者、金髪ツインテ王女、青髪ポニテ騎士、灰色の暗殺者、白き魔女。

「へつくし！あー誰か可愛い俺様の噂でもしてるのかなあ、へへっ、モテる男の娘（子）は辛いぜよ。」

そして、今だ誰も見ぬ異世界の狐の物語。

『狐ガ仲間ニナリタソウニコツチヲミテマス』

勇者、異世界を知る（後書き）

『ワールド幻想世界』

勇者が訪れた世界を指す。この世界での幻想とは褒め言葉の最上級を表す。簡単に言うと、超良い世界、という意味。剣と魔法と勇者、でも魔王がもういない。考えつく亜人とか獣人とか大抵揃っているかもしれない。広かったり狭かったり、そもそも異世界という不思議な世界である。異世界との関連は不明。

2010 11 / 15 魔女の名前の語呂が悪いので勝手ながら変更しました。

狐、勇者と出会う

「勇者のお供が決定？」

「インなんちゃらに……ほら、灰色つてえ奴だったかなあ。ま、ぼーずにはまだ早え話だぜ、ガツハツハ。ほら、子供が酒場を彷徨かない！」

「うん！ありがとおっちゃん！」

「……Oh」

頬を赤く染める酒場の親父を内心で罵るが、彼は上手いことそれを表情に出さずに酒場を後にした。ガラン、と観音開きの乾いた木の扉が鳴る。

酒場を後にした彼だが、南の大通りをプラプラと彷徨くことしかすることしか無かったようだ。暇という意味なのか、尻尾が少しだけ揺れている。

何か面白い話はないものかとよく音を拾う金毛が生えた耳をピクピクさせるとも、全部似たような話ばかり。

「インレテスの魔女に灰色、ついでに水没王女に護神騎士とは、なんと豪華な……。」

勇者のお供が決まった、という話ばかりである。500年に一度のイベントのせいかこういう細やかなことでも話は盛り上がるようだ。

勇者がどういふ存在かはよくわからないが、ミドルアークの魔導の名門『インレテス家』の黒白い魔女、ギルドで最高位のクラスを保有するダークエルフの暗器使い、通称『灰色』に、戦場で傷ついた兵達を治療しようとして何故か水びたしにする『水没王女』、更に王女を守る、神に仕え聖なる神秘を用いる『ハラティーン護神騎士』の竜人。

「後衛ばつかだな、後からはり倒す気か」

金がねえ、とシヨンボリ垂れた尻尾を耳を弄くりながら彼は南の門へと向かった。外にいる魔物を、あるいは生き物を狩って今日の腹の足しにしよう、というわけである。

そこで運良く魔物の鱗とかが手にはいるならば、それを売って財布の肥やしにも出来るという一石二鳥っぷりを見せ付けれる。

彼は腰に括り付けられた白銀色の金槌を手にとって、上等な得物が見つかりますように、と普段考えもしない神に適当に祈りながら外へと向かった。

向かう途中にて「外は危ないわよ、ぼーや。」とか「わ、わわ私がいよいよ一緒に…」とか聞こえて来たが…、

「僕ねー、一人で頑張るんだー、えへへへ」

全部撃沈させて言ったという。カツカツカ、とどこぞの爺のように愉快に笑う彼に気付くものは誰一人ともいなかった。

彼から見れば中途半端な冒険者など、正直”足手纏い”でしかないのだ。もし、パーティを同行する者が魔導師などの後衛ならばまだ

共闘出来る可能性もあるが…。
南の大通りへと続くミドルアークの南門、ガツチリとした鉄色の重
そうな門が目に入る。そこを通る行商人の馬車や、ハンターが巨大
な魔物を倒してきたのか、魔物を乗せた荷台を運ぶ巨大な四足獣、
これまたいつも通り繁栄している証拠でもあるう。
彼は耳をピョコピョコさせながら鉄色の門をくぐり、見渡す限りの
大平原へと足を運んだ。

『ミドルアーク大平原』

都市国家ミドルアークを囲む形で存在する大平原である。いかにも
始まりの場所っぽく、そこには魔物と言えるような凶暴な生き物は
限りなく少ない。疎らに存在する小さな林やら木々やら、時折行商
人達のキャンプがあったりと危険度は最低とも言える。
さて、そんな草原を突っ切る形で整備された、剥き出しの地面を走
る馬車が一台あった。なんと乗っているのは男一人に女4人、狭い
馬車という限られた空間にソレとは……実にうらやまけしからん話
である。

「魔導の名門？」

「とはいつても普通に小さいころから勉強しているだけよ。名門だ
なんて昔を引きずっているだけね。」

勇者の問いに魔女は答える。素っ気なく魔女は答えるが、それでもすごい、と勇者の側にいた王女が返した。

ミドルアークにおいて魔導を嗜む家と言えば魔女の出身であるインレテス家がまず上がるほどに、彼の家は魔法に関して特に進んでいるのだ。

その中でも、魔女……白い魔女とか黒い魔女とか矛盾しているような名で呼ばれるマニラこそが、そのインレテス家の中でも最高と言われるほどの天才っぷりを発揮していることは有名な話であった。ちよつとそういうものに興味がある勇者だが生憎、魔法を教えてくれ、と出会ってすぐの魔女に言うのも気が引けると勇者は口をモゴモゴさせながら我慢するのであった。

「でも、そういうことじゃそっちの灰色も負けてないでしょ。」

「……………ん。」

「あの灰色にインレテスの魔女とは、かなりのメンバーですよタケル殿。何もする必要がありませんね!」

「は、灰色?」

「……………そう言われてるだけ。」

魔女の問いに暗蒼色の肌を持つ暗殺者が短く返す。灰色、暗殺者の二つ名である。たかだか色を表す単純な二つ名であるが、それゆえに呼ばれることは名誉なことでもある。

何故暗殺者がそう呼ばれるのか、それは統轄機関ギルドの中でも一つの国に10人にも満たない最高峰のギルドランクを所有する存在

であるからだ。だからこそ噂になり有名になっていく。それに暗殺者の暗蒼色の肌と銀の髪の毛、明確に灰色というわけじゃないが暗殺者を表すと言ってもいいだろう。

だからこそ冒険という点におければ暗殺者に勝てる要素は皆無である、無論戦闘においても言えるのだが。

胸を張ってもう大丈夫！と言わんばかりの騎士だが、むしろそれが問題ですと勇者は思わずにはいられない。

基本的に男尊女卑が無くなったとはいえ名残が少し残る日本に生まれた彼からすれば、男のプライド、とかいう食えない物をいくらかは所有していたのだ。

勇者は何もしないのとはどうかと思う。まあだからといって戦え、と言われたら速攻で逃げる自信があるぜ！と自問自答するのがこの勇者である。

「……………クリステイも。」

「陛下より直々に名前を貰った最強の護神騎士が謙虚に出るものねー、クスクス。それにドラグーンなんてかなり珍しいわよねえタケルって、言われてもわからないかしら。」

「あ、ああ、申し訳ないけど、ね…………。」

「……………気にしない。」

「なに、ただの亜人の1人ですよタケル殿。」

「(竜ってすごいんじゃないの?)」

記憶喪失と偽って見たものの、特に反応は無かった。勇者もそういうものだろうという自覚もあった。

所詮”勇者の旅”に同行する護衛的な何かである、親睦を深めるのはいいことだが、相手が記憶喪失だからといって特に行動を起こす気があるだろうか……。

それはともかく、今更になってパーティの規格外を勇者が理解した。なおかつ自分が最低クラスだということに。

ゲームで考えれば、周りだけレベル50代な感じ、もちろん勇者は1である。

だが、嘘とは言え無口な暗殺者の小さな慰めに泣きそうになる。

なるべく考えないようにした”家”のことが……、そこまで来て勇者は頭を振り考えないようにした。

「……………ムフフ。」

次はワタクシの番ですね！と言いたいのかわくわくしている王女が目に入る。まあ彼女も第一王女ということもあるのだが、有名なのはその御陰ではない。

「貴方は水没王女ですってね、勘弁して欲しいわ。」

「す、水没……………？」

「ギニャアアアアア！それ言っのじゃないのです！」

暗殺者が王女を押さえている間に魔女が勇者に説明を始めた。勇者の隣でニヤーニヤー騒ぐ王女に苦笑を浮かべながらも、非常に気になるということで魔女の話に耳を傾ける。姫様、と慕う騎士がいたのだがむしる騎士もノリノリである。羽交い絞めを王女に決め込んだ騎士は満足そうに魔女に話を進めるように顎をクイツとやる。

「戦場で傷ついた騎士をね、クスクス。」

「ゲエー、めっちゃ予想出来るんですけど。」

「傷を治そうとして、魔法が暴走。属性が水だったせいかはわからないけど水の魔法をぶちまけたのよ、クスクス。」

「で、でもあの騎士のケガは治ったのです!」

「あ、でも逆に溺死しそうになって苦しモガツ!？」

ムッキー、と怒り狂った王女は金髪ツインテールをウネウネさせながら騎士に反撃で出ている。アハハハハ、とまるで妹とじゃれついている姉のような騎士である、勇者は心の中で大いに笑った。

だが、今でこそこっぴどい笑いが、一歩間違えれば色々大変だったのではないかと勇者は思う。

価値観が違うせいかと色々思うも、まあ昔の話だしなあ、とハハハと笑い声を漏らすだけに終わった。

「でも、何で暴走?」

「ウグツ、そ、それは…。」

「まあ色々あるんですよ〜姫様。」

こっちは大丈夫だろう、と勇者は尋ねた。王女はしどろもどろになりながらも説明する気ではあったのだろう。

ハア、と一回ため息をつくると王女が持っていた杖を構えて口を開いた。勇者は王女の神妙な顔つきに思わず生唾を飲み込んだ。

「ワタクシはこの神具『果て無き夢の世界』アグリローディナの継承者なのです。」

「ふうん、そう言うならばお供になるのも納得が行くものね、阿呆らしいけど。」

「へ？あぐり…ん？神具って…あの…。」

そうなのです、と王女は返す。王女の持つ儀仗型の神具とは、それはかつて5000年前に使われた勇者のお供の一人が使っていたという『神具』ファンタズムであり、そしてその者こそ初代ミドルアーケ女王であったのだ。

その杖は圧倒的までな”収束”という概念を内包していると言われ、杖から放たれる魔法の光は空一面の魔物を切り裂いたという。

女王はその杖を用いて大草原の真ん中、平和と国家の協力を望み一つの都市国家を築き上げたのである。

「収束の概念、って？ああ、なんかすごく申し訳ないのだけど…。」

「……………超やばい。」

「一言で言うならジーニアスの言う通りね、初代ミドルアーク女王は神具で補正された勇者の魔力ですら足下にとどかない魔力を保有していたと言われるわ、その莫大だなんて一言で澄ませるには無理なほどの魔力と、一点に集まるという収束の概念が合わさったら、まあ国の2、3個滅ぼすなんて余裕でしょうね。」

「……………超やべえな。」

「……………ん。」

「伝承には”星を破壊する光”と比喻されてますね。」

なにそれ怖い神具怖い、と騎士の言葉にそう返すことしか出来なかった。概念という話だが、勇者はある程度それに理解を示していた。王女等の話から推測するには、神具には様々な形があつて、一つ一つに極められた”概念”が内包していると勇者は踏んだのである。それは勿論正解である、ただ、勇者が思っている以上にその”概念”は”単純で強力”であつた。一端神具の話は置いておく、と勇者は脳味噌の片隅にそれを思い出した。今は、その神具と王女の関係であるからだ。王女はゴホン、と一つ咳払いをし続けた。

「ですが、ワタクシにはこの神具の能力の1割も行使出来ません、

ある程度の恩恵は継承者ですので受けてはいるのですが……。」

「まあ”担い手”が現れるなんて眉唾ものですね。」

「担い手と継承者ってどう違うのさ。」

「ハア、記憶喪失って面倒臭いわね。」

「まあ騎士になる前は、教養も受けられない身分でしたので私も知りませんでしたけどね。」

ハハハ、と魔女に乾いた笑いしか返すことは出来なかった。継承者と担い手、神具を使うという意味では同じであるが一番違うのは神具に選ばれるか選ばれないか、の違いであろう。

継承者は、代々女王の席より「この神具を扱う”私”が貴方がこの神具を扱うことを許可する」と、正式に受け継いだの継承者である。しかし神具からの加護は受けるものの神具本来のパワーから見ると微々たるもの。しかしそこで考えてほしいのが、半減どころかスズメの涙程度の神具だとしても5000年ミドルアークは代々受け継いだ女王、あるいは王に統率されているということである。

「担い手ってのは？神具に選ばれるってのは………どういう比喻？」

「へえ、頭は回るみたいね。」

担い手は、先程の例から見ると初代ミドルアーク女王に当たる。”神具”が扱うことをその者に許可を出すのだ。

これは『神具』としての最高峰の性能を發揮する存在へと一気に昇華する。莫大な加護に、超絶な”概念”の行使、神の恩恵とも言えるべき身体能力や異常に対する抵抗。一つの神具で攻撃から守備をカバーする無敵アイテムなのである。

そしてなによりこれは全て魔王を倒すための存在である。魔王がいない世の中に、魔王を倒すための力、人智を越えた概念、危険なのは言うまでもないだろう。

「魔王がいないんじゃない……担い手はいないってこと？倒す相手がないのに、危険すぎるか……。」

「……………そう。」

「そういうこと、まさか推測でそこまでイケルなんて思わなかったけど、クスクス、及第点ね。」

魔女が勇者の頭をナデナデする、思わず顔を真っ赤にして「やーめーろーよー。」と馬鹿餓鬼みたいな物言いに面白そうに魔女は笑うだけであった。

王女が言いよどむ原因はここにあるのだろう、例え継承者で力が制限されている神具ですら、女王の血を受け継ぐ第一王女である王女が制御出来ない、という点なのだ。

勇者から見れば、そんなすごい神具とやらを扱うことが出来るというだけで「スゲエ……」である。決してスゲさんのことではない。王女は落ち込むかと思われたが、意外にも元氣よく杖をブンブン振り回した。

勇者はそんな光景が、ただ眩しすぎるものであった。

「ですから担い手にはなることは無いでしょうが、これを完全に扱えるためにも！ワタクシはこの旅に参加したのですよ！そ、それに……ゴニヨゴニヨ。」

「姫様つたら、順序がぎゃモガツ!？」

「クスクス。」

「……………ん。」

「（え？なんでフラグ立ってんの？）」

顔を真っ赤にして勇者をチラチラ見てくる王女である。どこそ物語の主人公ヨロシク気付かない勇者ではない。

ただそれが、もしかしたら勘違いかも、という話があるのだが……。まあこの勇者のは勘違いでもなんでもなかった。

男1人と女4人を載せた血涙満点の馬車が平原の一本道をゆっくりと走っていた。神具の話を終えた勇者達は、互いの趣味やらなんやらを聞くという不思議モードに突入、男1人である勇者が超気まずいのは言うまでもない、それが勇者しか思っていないこと。さて、ガタガタゴロゴロと妙に気合いの入っている馬が引く馬車から遠くを眺めていた”勇者”が何かに気付いた。

「ん？なんか動いてる？」

「……………モコモコ。」

え？なにそれ気になる、暗殺者の返答にそう言わずにはいられない。だが、別の女性陣はそうでも無かったようだ。三者三様とも言えるべき反応である。1人は目を輝かせて、1人はお腹を撫でて、また1人は呆れながらため息を吐く。

「おお！モコモコですか！？」

「焼いて食べモガツ！？」

「まあどこにもいるから……。」

なにそれ、と聞くと簡単な答えが返ってきた。曰く「毛がもこもこしていて、どこにもいて、肉は美味しく、妙に繁殖力が強く、毛皮は様々な用途に使われ、骨は装飾に、そして何故か警戒心が無い不思議生物」だそうだ。

変な方向でチート生物だなあ、と勇者の脳内に現実出身らしい言葉が通り過ぎた。

更に言うには、「どこにも」というのは火山地帯から氷山寒冷砂漠洞窟毒の沼あらゆる場所のことらしい。

「ついでに言うなら住む場所で毛の色も違いますよタケル殿。雪国

の白いモコモコは結構値段張るそうですよ。」

「ペットとかに良いんじゃないのかな。」

「貧しい家はみんなそうしてるわ、だから人気だけど上流階級には広がらないようね。見栄ってのは役に立たないけど必要なものだから。」

なるほど、と妙に賢くなつたような気がする勇者である。で、生物という学問が存在する現代から来た勇者から見ればまだ疑問はあつた。警戒心が無い野生動物とか聞いたことねー、って奴である。天敵とか居ないのか？絶滅するんじゃないのか？そういう疑問だが、今見る限りそんなことはコレっぽっちも無いみたいだ。

「んー！もう我慢出来ないのです！モフモフー！！」

「……………ダメ。」

「ニャー！？何故邪魔するのですか！？」

ツインテールをクネクネさせながらモコモコに近付いていく王女だが、その直前で暗殺者が止めた。王女の首根っこを掴み持ち上げる。高身長でスラツとした暗殺者から見れば王女はまだ子供サイズである、ハハ。

なんですとー！と王女が疑問の声を上げる、が暗殺者の答えは返ってこない。そして相変わらずモコモコは平原の草をモシヤモシヤしていた。

そのときである……………。

ズドン!!

ビチャビチャ!!

「……ほえ？」

「……だから。」

王女の眼前に壁が出来た。白銀色の綺麗な壁……否、鉄槌だった。同時に聞こえる液体が迸る音、ちなみに真っ赤である。その一部が王女の頬を擦った。ソローリソローリ、と王女の視線が下へと下がる。巨大な鉄槌の下には何があるかなあ、とそんな声が愉快的な音と踊りと共に聞こえて来そうである。予想しているかもしれないが……真っ赤な池が出来ていた。あとピンク色のミンチ的な何か。

「危ないよー、まったく。折角大量なのに」

「ぎにゃあああああー!!!!!!」

黄金色の狐の耳にこれまた黄金の髪の毛に尻尾、異世界の狐の声を遮り王女の悲鳴が平原に兎玉した。そのまま矢となって光をさす道

になりそうである。さて、そんな激しい王女であったが、それを引き起こした彼はというと、実にのんきなもので…、走り回りながら気絶しているというありえない器用さを誇る王女のそばにいた暗殺者と色々言い合っていた。勇者のほかの仲間も、似たようなもので完全に王女存在を消していたという。

「やっぱり塩焼きがいいよねダークエルフのお姉ちゃん。」

「……………タレで。」

「ほわあああー!?!?ほわっ!?!?ほわわあ!?!」

「なかなか良い槌ですね。」

「へえ、バラしてみたいわね。」

もちろん、勇者は目を点にしたまま、普段通りの仲間達と見知らぬ狐耳に狐尻尾の生えた一見女の子っぽい少年を見るだけであった。

『王女ガ気絶シタヨウデス』

狐、勇者と出会う（後書き）

『亜人・獣人（ワー・ ）』

エルフや小人族といった身体的特徴が人間と微妙に異なる存在以外には、明確に亜人獣人の境は存在しない。本人が亜人と言い張れば亜人で獣人もまた然り。ただ基本的には人間っぽいのが亜人で、半分以上が毛で覆われていたり顔が獣っぽかったりするのが獣人であると言ってもいい。中には同じ素材でありながら亜人獣人に別れているものもある。「まんま歩く狼」と「狼の尻尾と耳が生えているだけ」な感じ。前者が獣人で後者が亜人である。ついでにどっちもワー・ と読む。

『狐の亜人』
ワー・フォックス

『猫の亜人』
ワー・キヤット

『狼（犬）の亜人』
ワー・ウルフ

この三つが亜人三種の神と言われている、容姿的な意味で。

狐、旅に出る

「何がなんだかわからない」

勇者はそう呟く。というのも無理はない。異世界に突然召喚され、非常識な常識を叩き込まれ色々なことに驚いてきた勇者だが、今回のもまた格別なものであった。突然の乱入者、勿論その乱入者本人であるショートカットに揃えられた黄金の髪のと、これまた黄金のように輝く毛でフサフサの狐耳と尻尾を持つ人間ではない彼からすれば……乱入というかタマタマ勇者達がそこにいただけと言える、勇者は彼の出現には二重に驚いた。

「旅ねー、今時はやらないっしょ、冒険者じゃあるまいし。」

「……………ん。」

まず彼が亜人という点であろう。現実出身である勇者から見れば彼は様々な書籍やテレビ画面の向こうに登場する存在である。しかも、狐である、狐であるのだ、大切なことである。今こうやって、モコモコとかいう不思議なナマモノを青色の炎で焼き上げながら暗殺者と会話になっていない会話を続けるこの存在。勇者は現在進行形で尻尾がモツサモツ動いているのを思わず目を追ってしまう。

「んー、モコモコのハンバーグなのですー……。」

「一体どうしたんでしょうねー姫様は。」

「貴方わかって言ってるでしょ?」

「さて、なんのことでしょうねー。」

可愛らしさ満点のモコモコが目の前で粉碎されるというショック映像をすぐ近くで見っていた王女は相変わらず目をグルグルとさせていた。夢を見ているのか、どういう夢なのか非常に気になることだが、だからといって後で起きるであろう王女に聞く勇氣も無い勇者は何もすることがなく肉が焼き上がるのを待つのみである。

「……………勇者だから。」

「……………は?アレが?」

「……………あれが勇者。」

そして更にもう一つ驚いたというのが彼の服装である。何を隠そう彼の服装というのは、勇者がいた日本古来の和服という着物によく似ていたのだ。薄い青を下地にした真っ白な和服である。縦に大きく切れ目の入った緋袴から見える真っ白な太ももが厄い、思わず勇者が目を逸らしてしまうほど。履き物も日本固有のものに近い、よく見る足袋に天狗下駄、幅広い空色の帯に腰回りにジャラジャラと音を鳴らす鎖。緋袴の後側には先程まで元気にフリフリしていた尻尾が何故か今ではピンツと天に向かって固まったままであるが……………。

鎖に引っかけるようにつけられた輝く白銀色の金槌、チャポチャポと中身の液体を揺らす紫色の瓢箪が妙に目だっていた。

「み、みみみみみミコーン!!!!!!」

「ウワツ!?て、敵襲なのです!?!」

「……………?」

ぶっちゃけジロジロ勇者に観察されていたことを知っていた彼であったが、まあ女性の前であるため特に行動することもなく適当に暗殺者と会話を続けていた。だが、今の通りに暗殺者の”勇者発言”に彼は驚きのあまりに轟き叫んだ。その声に反応しガバツと起きあがった王女。そのうえ王女が持つと指定危険物マツシグラの杖を手に持ち出した。何事ディスプレイ!?!と叫ぶ王女を羽交い締めにして騎士は王女をなだめる。魔女は関係無いと言わんばかりにワケのわからない言語で書かれた本にのめりこんでいた。勇者が彼の突然の叫びに驚きながらも、平常心平常心と心で何度も呟きひっひっふー、と息を繰り返すこと数度、静止してた彼が突然動き出した。

「ってこたあ、この糞ツタ…………この人が勇者なの?」

「……………ん。」

「え?糞?…………え?」

勇者の耳に聞こえてはいけない単語が聞こえてきたような気がした。

ガビーン、と彼のほうを向いてみれば先程と同じようにニコニコ笑顔でコテンと首をかがげる。しかし勇者は先程とは違うと感じたのだ。勇者の勘（笑）が告げていた、これは違う、と。どこか能面のような、笑顔の向こうでギャハハハ！と薄汚い笑い声を上げているような、あながち間違ってもいない。

「（ゲエツ！？こんなモヤシが勇者だと！？しかも出会ったちまたよー糞ツタレい！）」

「え、えくと、そういえばさ。君の名前はなんていうんだい？」

彼がどういふ思考をしていようが、勇者からすれば無関係者である。彼は間違いなく出会いたくも無い阿呆集団のお頭アである勇者だが、その勇者は出会ったのも何かの縁と思いとりあえず仲良くなる、というか会話をしている以上失礼の無いように名前を聞き出そうとした。彼はというと、関わりたくも無い奴らに名前を教える必要性など少したりとも無いのだが……「愛されモテカワボーイ」をうたっている彼は聞かれたら笑顔で答えるしかない。名前を聞かれて答えないなどそれこそ失礼極まりのないことであるのだ。ここで偽名などを使えばいいのかもしれないが、それは勇者の周りがさせないだろう。

「え、えくとつとね、アハハハ。……チツ、僕の名前は『桜花』オウカって言うんだよ！ヨロシクね！」

「よろしく桜花。俺の名前は、やま、あー…、タケルって言うんだ。」

勇者のパーティに参加している者を見ればすぐにわかる。ギルド最高峰の冒険者”灰色”のジーニアス、魔導の”白き魔女”のマニラ・インレテス、最強の”護神騎士”クリステイアーネ、オマケでどうでもいい水没王女エルリア、特に灰色の暗殺者が問題に多い。職業柄人の嘘を見抜くのは得意だろう、偽名なんて一度も使ったこと無い上、焦りまくっている彼の即興の嘘などすぐに看破される。看破されてもやましいことは一つも無いが、そもそも勇者達に嘘をつくという行為そのものがやましい。国家などから支援を貰う勇者に對してそういうことをするなど、治療しようとして水害を起こす存在並にありえない。

「タケル？勇者様つては北東出身？」

「あー悪い。俺つて記憶喪失なんだ、なんか色々覚えていなくてさ。」

「…………へえ。」

そういえばテンプラも北東つて言つてたな、と勇者は前の騎士や王女との会話を思い出していた。おそらく北東には現実世界で言う日本に似た国や文化があるのだろう、と勇者は非常に興味を覚えた。北東辺りにそういう文化があるのなら一度行つてみたいなあ、と勇者は思う。しかしその思考は途中で中断された。彼がイソイソと支度を始めたからである。綺麗に捌き干していたモコモコの皮をたたみ始め、ドッコシヨと焼いた肉に目をくれず、ホナさいなら、と言わんばかりに…………、

「……………ダメ。」

「ちょ！ジーニアス何を」

「ミコーン！？」

そうは問屋が卸さない。暗殺者が彼の肩をガシツと掴んだ。彼は額から嫌な汗を流しながら必死に口を開く。そして今頃正気に戻った王女と、王女の側に控える騎士は黙ったままそれを眺めていた。王女は若干不機嫌な顔を見せていたが、さすがに何がそれを起こしているのか勇者にはわからなかった。

「な、何をするの、僕そろそろいかないと、ごめんね？」

「……………仲間、強い。」

「え、でもまだ子供」

「丁度前衛が欲しかったところだしいいんじゃない？それに一番強いわ。」

「マニラまで！？」

本をパタンと閉じてピシツと言いつつ放ったのは魔女。魔女は彼をキョロキョロと観察しながらそう呟いた。勇者は信じられない表情を浮

かべる。まだ10歳やそこいらの子供（に見える）彼を危険（な予定）の旅に同行させるなど、というわけであるが肝心の勇者本人が戦いも常識も知らない存在であるのは黙っておこう。暗殺者、魔女と彼の参加に賛成の意見が出た。彼からすれば有り難迷惑すぎる厄介な話なのは言うまでもなく、明らかに彼の戦闘能力を看破した暗殺者と魔女に不満タラタラである。そういわけで……、

「ウゲエ、このアホエルフにクソ魔女言いやがっ……あ。」

つい口を開いてしまった彼であった。彼はタラタラタラ、と滝のように嫌な汗を流しい尻尾がピンツと力強く立っていた。あるえー？と勇者は己の聴覚を疑った。この可愛い狐耳の少年の口からおぞましい単語が聞こえたような……間違いなく聞こえたからである。

「「「……………」」」

「あ、あははははー……………」

「クスクス。」

彼の視線が辺りを漂う。完全にバレてやがる！？と狐は思った。せめて誤魔化してくれ、勇者はそう思うものの逆にこういう行為が正しいと認めており、勇者の仲間達、少なくとも暗殺者と魔女は看破しきっていた。一番ショックを受けたのは、実は勇者ではなく王女であった。どこの世の中でも女の子は可愛いものが好きなものだ。可愛い彼の口から”糞”とか”阿呆”とか聞いてしまったのは

ついでに言うがその時の彼の顔はおぞましい物を見たときのように引きつらせていた 実に遺憾の意であろう。

「あ、あれ〜？おかしいですね〜。なんだが聞いてはいけない」

「うるせー！！文句あるポケエ！？はり倒すぞ！？おお！？」

「本性を現しましたか、実に面白いですね桜花殿。」

「……………腹黒狐。」

「タケル、なんとかしなさい。」

「無茶言っんじゃないね…………。」

王女は顔を引きつらせながら言うが、その上に被さるように彼が叫び始める。「もうバレてしまったのはしょうがない！どうせだから俺はこっちの道にいくぜ！」と言わんばかりに怒号の如く。騎士はそんな裏表の差が非常に大きい彼を、面白エ、と思いながらモコモコの焼き上がった肉にかぶりついていた。

「ぜってえお前等なんかと行きますかー？絶対に断りですー、ああ！？」

「クスクス、いいのかしら？」

「なんでだよー！？」

この人は勇者なのよ？そう言った魔女に彼は首を傾げる。コテン、と可愛らしい仕草ではなく隙あらば舐め殺す(?)といった感じに眉を寄せて睨み付けながら、である。魔女はクスクス笑いながら続けた。魔女の言葉を聞くと同時に彼の顔が段々と青ざめていく。

「勇者は世界各国のバックアップを受けるわ。言い換えるなら世界各国、及び自治区は勇者に支援をしなくてはいけない。基本旅のお供もそうね、まあ雑魚が来ても困るだけだから募らせて試験という形だったけれども……。」

「み、ミコーン……。」

「クスクス、別に断つてもなんの問題もないわ。妙に目を付けられなくても問題無いのなら、ね。それで？どうするのかしら？」『金狐族』のぼーや？目立ちたくないでしょう？」

金狐族、と魔女がその単語を言った瞬間辺りの空気が変わった。威圧感、とでも言えばいいかもしれない。彼は無表情のまま目を真っ直ぐと魔女のほうへと向けた。重圧が辺りを包んだその一瞬にて、暗殺者と騎士は戦闘態勢を取った。反応が遅れた王女と勇者は「なにこれ怖い」やら「どうしてこうなった!？」などと思わずにはいられなかった。ただ、それを口に出すことは出来なかった、今の二人には今まで感じたことの無い　そういう存在がそもそもいない現実から来た勇者や、権力的にそういう存在と相對したことの無い王女である　重圧が掛かり口を開くことも、動くことすらも出来なかったのである。

「黙れ『四分の一の穢れ（クォーターデビル）』が、浄化してやる
うか？あ？」

「へえ、言ってくれるじゃない。」

「お？やるか？オセロ魔女め、ひっくり返してやるぞ。」

「黙りなさい、よく言っわ駄狐、お婆様を貶すなんて。」

魔女と彼が色々言い合っているせいか、その場を包み込んでいた重
圧がいくらか軽くなる。王女と勇者は顔を引きつらせながらこの場
をどうするのかという作戦会議を始めた。

「（めっちゃ怖えええ！？しかもマニラって人間じゃなかったんだ
！？え？デビル？悪魔っ子だとう！？）」

「（ちよつとクリスティ！なんとかするのです！）」

「（難しいですね、守ることは出来ますが……あれほどの手練れと
なると……）」

「（手練れって、桜花ってまだ子供）」

「（………亜人、歳違う。）」

「（あ、そういう奴か……どれくらいかわかる？）」

「(……………金狐族、見た目、十倍。)」

「(鍛錬量も人間の10倍、その上超人特有の身体能力とがありますね。)」

「(……oh)」

ヒソヒソ、ヒソヒソといつのまにか騎士と暗殺者も参加していた。勇者達の作戦会議の光景の背後には、彼と魔女がいるが……、ぶっちゃけ作戦会議をしている勇者達に興が削がれたという奴であろう。魔女と彼はハア、とため息を吐き武装を解除。だが彼は魔女を睨み付けていた。

「フン、いいよもう。仲間でもお供でもなんでもやってやるさ。」

「「なんですと!?!」「」

その声がたまたま聞こえた王女と勇者の音がハモる。彼は声では納得しているようだが、表情が残念すぎた。例えるなら「便器を手で磨け」と言われた時の顔だろう。隙あらばその水の溜まった便器に教師の顔を叩き込みたいといったところ。一応表記しておくが便器は意外と清潔である。汚い場所なんてとんでもない。

「クスクス、素直じゃないわね。」

「うるせえー魔女っ子。」

「…………仲間。」

「ふむ、前衛が増えるのはいいことですね。正直私だけじゃ心許ない。」

フン、と息を出しながら彼はそっぽを向く。尻尾がパタパタと動いていたのは、誰も気付くことはなかった。狐と勇者、魔女、暗殺者、王女、騎士、後に語られる『史上最悪』な勇者パーティの誕生の時であった。

「あ、ああヨロシクな桜花。そういえば金狐族って…………？」

「私もどこかで聞いたことあるような気がするのですが…………。」

「まあ、亜人の中でも特に有名な部族ですからね、さすがの姫様でも聞いたこモガツ!？」

「『狐の亜人』^{ワー・フォックス}の中の部族よ、黄金色の毛が特徴ね。あとは火の扱
いが上手いことかしら。」

「……………もふもふ。」

「ええい触るなダークエルフ！高貴な俺様の尻尾になんてことを！」

「（拝啓お母様、仲間みんな濃すぎてついていけません、敬具。）」

勇者は自分の影が薄くなっていくことに気付いた。そして後でこれまた気付く事になるのだが、仲間達が言うように彼が一番強いのなら、更に自分の立場の無さが加速していくのではないか？という疑問があつた。命を落とす危険性が少なくなったことに喜ばしいのか、それともまんま子供の彼や女性達に守られることに嘆くべきなのか…。

「なあマニラ、クォーターデビルってどういうことさ。」

「あら、気付かなかつたの？……そういえば隠していたわね。」

チヨコーン、と魔女の背中、黒い艶のある髪の毛をかき分けて出てきた小さな翼。勇者の予想通りの悪魔っぽい翼だが……サイズが違う。バサツと、そんな風に考えているようなサイズだったのだが、なるほどこれがクォーターって奴か、とよくわからない納得を勇者はした。パタパタと魔女が翼を動かすが、全然飛べそうにねえ、と勇者は呟く。必要ないもの、と魔女は勇者に答えるがその意味が”どっち”に当たるのかはあまり想像したくはなかつた。

「（飛ぶ必要がないのか…、翼無しに飛べる意味なのか……後者だと怖エ、さすがファンタジー。）」

そのとき縁起でもねー、と呟く彼を見て、勇者は思い出したかのように彼に尋ねた。

「桜花って寿命が違うんだろ？何歳なんだ？」

「んー、ひーふーみーよー……。」

一つ一つ指を折りながら数えていく彼である。腹黒狐にも、体型的に素直でこういう部分があるのだろう、と勇者は妙に嬉しく思った。ただ、その数えが終わったのは数分後であったことを除けば、良い最後になったかもしれない。

「今年で108歳だ。」

『狐ガログインスルヨウデス』

狐、旅に出る（後書き）

『果て無き夢の世界』^{アケリローディナ}

儀杖型収束神具、事実上無限に魔力を収束させ破壊力をぶちまけるチート武器。そういう概念のため魔力以外にもいる収束出来る。担い手に莫大な魔力を素で与えるから困る。必殺技はスターライトなんちゃら。初代ミドルアーク女王から代々伝わる数少ない継承者がいる神具である。完全に砲撃系の神具であり伝承には『相手からお話してくる（泣いて謝る）ほどやばい』という表記がある。初代ミドルアーク女王と親友柄であった勇者のお供の一人とはよく潰しあつた。無論、その親友も担い手である。

勇者、頑張る

「え、え〜と、名前はタケル、クラスは勇者？でいいのかな……。」

「私はマニラ・インレテスよ。クラスは魔導師、言う必要はないと思うけどクォーターデビルよ。」

「クラスは護神騎士、名はクリステイアーネ・D・ヘカティという。ちなみに竜人だ、まあ同じく見た目でわかるがな。」

「……………ジーニアス、ダークエルフ、暗器使い。」

「ワタクシの名はエルリア・センペ。」

「長え」

彼の勇者パーティ参入ということで、改めて自己紹介という形とっている一同である。なお、王女の名前は非常に長く覚えにくいだが、彼の一言が王女の紹介を叩き切った、彼も同じように自分の名と種族、そして『職業』^{クラス}を告げる。

「桜花だ、見ての通りワー・フォックスだ。クラスは魔槌士。」

「魔槌士…?」

基本クラスというのは自己申告であるため自由に名乗れる。ただ、

戦士とか盗賊とか、よくある物以外での話である。ギルドは自己申告という形でそれぞれのクラスを管理し、時に必要ならばそれらを募ったり、直接依頼を与えたりするのだ。

「超前衛ね、まあ丁度良い感じになるけど。」

「魔槌……要するにハンマーと魔法を組み合わせて敵をぶちのめす脳筋のことですよ、タケル殿。」

「脳筋……。」

「失敬な、これでも教養はバツチリだボケエ。」

自己申告にも問題がある。それが”嘘”かもしれないという点だが今のところ大きな問題にはなっていない。冒険者のパーティを募るとき、クラスを参考にしているのだが、もし嘘ならば問題が起きよう。しかし、一番困るのは嘘をついた本人である。妙なことをしでかしてパーティの信頼を失い、下手をするとギルドがはしゃぎ回ることもある。

「それにしても桜花のハンマー……さっきのと大きさ違うよな？」

「フン、ただの大きさの変わる代物さ。」

「便利ね。」

「……………便利。」

そう、彼が持つている白銀色の金槌は大きさが変わる。先程モコモコを叩きつぶしたときは、まるで巨人が持つような大きさのものであったが、今の大きさは彼の腰の鎖にくくりつけられる程度の大きさ。普通に釘を打つような金槌の大きさであるのだ。魔女と暗殺者は、そういう特殊な能力を持つ武具に見慣れているのか特に驚くこともないが…、やはりそこは現代の勇者であった。

「すげえ、ちよつと貸し」

「お断りだ、アホ勇者、一回死んでこい。」

「タケル様になんということをツ!？」

「まあ己の得物をホイホイ貸すようことはしないでしょね。」

そういうもんか、と勇者は納得するが……ゲーム画面などで登場するような伝説の武具(笑)みたいなのが目の前にあるのだ、ここは男として是非とも触ってみたいものだ。一応、幻想世界最高峰の存在が王女の手握られているのだが、男は前衛一択である、興味なんか無かった。一応言っておくが純粋な破壊力と殲滅力なら神具のなかでもトップクラスである。もっともその事実を知るのは現在存在していないが……。

「チエー。」

「……本当に便利よね、それ、ねえ桜花？」

「少し黙れよ魔女っ子お。」

「……………喧嘩ダメ。」

「ミコーン！！何かしたら尻尾を触るのを止めろっ！」

「ハハハ、仲がいいことで。」

「最近クリステイが何考えているのかわからないのです。」

「（俺から見れば全員そうだよコンチクショー……）」

うがあ、と勇者は頭を捻る。パツカパツカ馬車を引く馬 実に当たり前のことだが に背を預けるようにして寝転がっている彼に目を向ける。やはり気になる、と勇者は改めて彼の服装を観察した。無論、素人どころか常識が欠落している（関係ない）勇者の視線などすぐにわかるものであった。もし、彼自信の腹（黒）芸がバレていないのなら気付いていないフリをするのだが、とつくにバレてもはや勇者達に隠す気もない彼である。

「なんだクソ勇者。」

「クソ勇者！？俺ってタケルっていう名前があるんだけど、桜花。」

「わかったぞクソ勇者。」

「……………」

「それで？」

「え？」

「何か用？さつきから視線がエロいぞ馬鹿タレ。」

「タケル様……………」

「違うぞエルリア！これは誤解だ！実際見てたけどやっぱり誤解だ！」

話が進まねえな、と考えながら彼は勇者と王女が乳繰り合うのをどこか遠くを見るような目で見ていた。よっこいしょ、と馬に背を預けていた体勢から普通の馬乗り状態になった彼は辺りを見渡す。未だに続く大平原である、なんてこつたい。旅に参加してまだ数時間という僅かな時間の間でもうすでに彼は色々と飽きてきいていた。

「みんなに聞いて欲しいことがあるんだ。」

王女とのニャンニャンが終わったのか、勇者の一声が馬車にのる皆の耳に届いた。勇者は一置きして続きを言う。

「俺に戦い方を教えてください。」

「……………へえ。」

「……………ん。」

「確かに、それは必要なことでしたね。」

勇者は頭を下げた。彼は珍しいものを見るような目で勇者を見やり、暗殺者は予感していたのかあっさりとした表情。騎士は納得と言わんばかりにコクン、と頷いた。魔女はパターンと読み込んでいた本を閉じ、横目で勇者を見る。

「ええー、危なくないですかー？」

「いや、むしろ危ないからしたいんだけど…。」

「でもですね、ぶっちゃけ今から間に合いますか？」

「そうだな、間に合わせるクソ勇者。」

「まさかの無茶振り狐だよコイツ！」

だが王女の言葉にも納得は出来るだろう。確かに危ないとはいえ、勇者の周りには1人を除いて歴戦の者なのは事実であり、それに守られている勇者はまさしく無敵という奴かもしれない。旅の途中で必ず出会うであろう危機からも、過去の勇者の旅の記録から考えればおつりが来るほどの戦力。しかし、勇者は男であった、もうケツの青い坊主じゃなかった。断固たる決意、とやらののか、勇者の真っ直ぐな目を見て言葉を出したのは魔女であった。

「私が魔法を教えるわ。」

魔女の言葉に続いて騎士も口を開く。

「じゃ私が剣の手ほどきを。」

ならば、と暗殺者も手をあげた。

「……………近接格闘。」

そして彼は面倒くさそうに、でも何故か”暇つぶし”の玩具でも見つけたような笑みを浮かべながら続いた。

「総合戦闘に生き方を教えてやる、シゴいていやるよクソ勇者。」

勇者は、狐、暗殺者、騎士、魔女の弟子となる。勇者から見ればそれぞれの戦闘力は会話などから推測するわけではないが、勇者は彼達が非常に強いことであると予想を付けていた。勇者の勘（笑）と言われるかもしれないが、と勇者の脳内は歡喜に満ちる。ありがとう、と一言勇者が言おうと口を開けば…、

「じ、じゃワタクシが……魔法……杖術……あれ？」

やってしまったぜ、と勇者は顔を手で覆った。彼はケラケラ笑っているし、魔女はクスクス微笑み、暗殺者はニコリと。騎士に至っては腹を押さえて必死に我慢している始末。勘弁してくれ、と勇者が思うのかもしれない。トバッチリは色々と男である勇者が担うのだから。ちなみに彼は男の娘なのでノーカウントだ。

「…あ、ああエルリアはさ、ほら！色々サポートとか！」

「ケツケツケ、水没の仕方でも教えてやれ」

「じゃかましいのです駄狐エ！」

「……oh」

「さすがです姫様。」

「愉快ね。」

「愉快すぎるよコンチクショウ。」

「……………頑張れ。」

応援してくる暗殺者に二つの意味で泣けてくる勇者であった。一つは単純に優しい暗殺者に感動したこと。もう一つは遠回しに色々な

荷物がのつかる勇者一人で頑張れと言っていることである。さて、とギヤーギヤーと王女が騒ぐ中、騎士が仕切り直しの声を上げた。この中で”戦闘”という一点に限れば騎士が最も優秀であるのは周知の上である。面白いことに、それぞれがクラスと得物を見せ合っただけで、彼らはそれを理解したのである。

「タケル殿には防御を主体とした剣術と格闘術、補助の魔法、生きるための野外活動能力、そして敵を追い払うための総合戦闘を学んで貰います。」

「あ、ああ!」

「剣術は私めが、魔法はマニラ殿、格闘はジーニアス殿に戦闘は桜花殿。これでよろしいですね。」

コクン、と一人を除いて頷く。

「はいはい！意義大ありなのです！」

「では反対がないので、これでいこうと思います。タケル殿もこれで？」

「ほえ？ワタクシ無視されてるのですか？」

「うん、頑張るよ。ハハハ、死なない程度によろしく。」

ガビーン、と王女からそんな擬音が出ている。それを聞きながら勇者はちよっとだけ、強くなった自分のことを妄想するのであった。

ガタガタ、と中途半端に整備された道を行く馬車の中で、勇者は初めて本格的に”旅が始まった”と、そう思えるようになった。

「おいクソ勇者、お前馬車から降りろよ、そして歩け。」

「えっ」

「さすがに走り込みをしている暇は、移動中には無いので、それで行きましょう。ささ、タケル殿頑張って！」

「なにそれこわい」

「……………体力、基本。」

「魔法も大量勝負よ、魔法の研究で七日連続の徹夜とかザラだから……………、ね。クスクス。」

「うへえーい。」

「疲れたらワタクシが回復してあげるのです！」

ケツケツケ、といまだに聞こえる彼の愉快そうな笑い声を聞きながら勇者は馬車を降りる。王女の回復に期待しながらも、逆に疲れたら即回復即馬車からたたき出されるのだろうか、と勇者は考える。現代では想像もつかないスパルタ教育であるが……………、勇者自身としては誰かに無理矢理されないかぎりこういうことはしないためか、ちよつとだけ体力のある自分に憧れたりするわけで、しぶしぶと従うことにするのであった。

走り出して数時間、自分でも理解出来ないほど長く走る勇者は、驚きに驚きまくっていたが走り出すと何故か妙に楽しく感じる自分に少し恐怖を覚えた。時折馬車の中から仲間達の励ましの声、ただし彼に限ってはケタケタと笑いながら飛ばしてくる罵声に近い言葉だが、そんな声に嬉しくも思いながらただ黙々と走り続けていた。

「ハツ、ハツ、ハツ、ハツ、ハツ。……おお、すげえ。」

ガタガタと車輪を回してゆっくりと走る馬車と併走するように走る勇者、勇者がフト、何かを思い辺りを見渡すと、夕方ごろなのか、西の方へと沈む橙色の燃えるような夕日が大平原を照らしていた。空高くに映える真っ白な雲は、空の蒼と夕日の朱で華麗に染まりながらも、なお己の白を強調しているかのように流れていく。

「タケル様ー！もうすぐ夜ですしここで野宿するのですー！」

「の、野宿……だとツ！なんてワクワクテカテカな。」

「ほえ？」

「なんでもなーいー！」

大平原の地平線の彼方へと沈んでいく太陽を見ながら、一同は丁度良い大きさの木のふもとで馬車を止めた。勇者はてつきり夜になる前に街か何かにつくかと思っただが、別にそうでもなかったぜ！と特に感心もなささそうに呟いた。夕日が沈む前に、と暗殺者と彼が近くの林の中に入っていくのを特にすることもなく眺める勇者に魔女が話しかける。

「そんなに珍しいかしら？」

「え？」

「ほら、夕日にしろ、桜花やジーニアスにしろ、なにか珍しいものを見るような感じですよ。」

「あ、あー…。」

「ま、いつか話してもらおうわ、クスクス。」

「うへえ……。」

記憶喪失には様々な種類があるという、知識が抜けるのか、それとも常識が吹き飛ぶのか、要するにそういう話だが…。魔女は勇者が”普通”の記憶喪失ではないことは薄々と感じ始めたのである。勇者は、魔女が気付いているのなら暗殺者も、彼もそうだろう、とちよつと己の不甲斐なさに笑いながらも、答えることが出来ない自分に嫌気がさした。別に旅が終わると、そう勇者が思うにつれて、別に本当のことを話す必要はない、そう思うようになったのである。

「まあワケありなのは貴方だけじゃなさそうけど。」

「え？何か言った？」

「なんでもないわ。」

ボソリと呟いた魔女の言葉を聞き取ることは出来なかったが、結構大切なことだったような気がする勇者は思った。太陽が落ち暗闇に近付くにつれてたき火の炎がより一層淡く輝くような錯覚を感じながらも、燃えたぎる炎の中に一瞬だけ向こうの世界の家族を垣間見た勇者は目頭が熱くなるのを感じた。

ズン……ズン……

「クスクス、ほら食事が来た。」

「なんかこう、すごい重量感のある音が……。」

「もうお腹がペコペコですね、ね？タケル殿。」

「お野菜はあるのでしょうか。」

森の方から鳥たちが騒ぎ飛び立つ音が聞こえ、バキバキバキイ、と何か巨大な物が森の木々をなぎ倒す様子が目に映る。何か巨大な影が動いている、もうすでに太陽が落ち、たき火の炎で照らされた暗闇の中、その何かが動いているのを勇者の目は捉えた。

「おい、大猫だぞー。」

「……………果物。」

「す、すごく大きいです……………」

脊が小さく見えるほどの大きさの獣を頭に乘せて手で支える彼と、背中に籠を背負った暗殺者の姿であった。熊とか、狼とか、そういった獣を足して割った感じの大きな生肉を、嬉しそうに切り分けていく彼にちよつと引きながら、肉の旨さに期待する勇者。時々、ブシユウ、とか、グシャ、とか何かが弾けるような音がするが気にしないことにした。終わったよー、という軽い声やし勇者が振り向くと返り血を浴びた彼が立っていたとか、そういうのは気にしないことにした。

「んー、川で洗ってくる。」

「……………ん。」

「あとは私達がやりますよ桜花殿。」

「塩漬けもね。」

そう言うと、まるで最初から居なかったのごとく消え去る彼に、フアンタジーだなー、ともう何も驚く気がしなくなってきた勇者だっ

た。肉やらモツやらを捌いた後に塩漬けを頼むこの神経、理解出来ないし想像も出来なかった。

「（とというか塩って結構、こういうファンタジーじゃ大切なものなんじゃねーの？魔法すげえな。）」

「余った半分は乾燥、冷凍もいいわね。」

「果物と一緒に漬け込みましょう、ええ！」

「……………辛く。」

「（んなわけねー…のか、ハハハ。）」

「ん？どうしたのですかタケル様？さつきから百面相で遊んで……………？」

「なんでもないさー。」

どこからか持ち出した木の枝に肉を差して焼いたり、暗殺者が持ってきた果物や森の幸をつまんだり、勇者が密かに憧れていた”マンガ肉”を生で見たり、まあ色々とあった夜であった。しばらくして彼が帰ってきた。まあ先程まで水浴びをしていたせいか、若干の水気を纏わせながら、ふいー、とたき火の炎に手をかざす。

「なあ？」

「なに？」

「なんてふんどし一丁なんだ？」

「別によくね？」

「……………ん。」

「乾燥させておくわね。」

「んー、どうもーさすが魔女っ子。」

妙に生々しいので勘弁して欲しかった。

「ちゃんと尻尾って繋がってるんだな。」

「お前は何を言っているんだ勇者、というか”さっきから”視線がエロいぞ？」

「な！？ば、馬鹿お前また何を」

「タケル様？」

うわああああああ

そんな声が大平原を駆けめぐった。とある麦の産地では、黄金の稲

穂が風で揺れることを”狼が走る”と表現するそうだが、それを参
考にしてこの現象を言うならば”悪魔が水平に飛んでいった”と言
おう。ちなみにこの悪魔とは種族的な意味ではなく、……言う必要
はないかもしれない。

『勇者八星ニナツタヨウデス』

勇者、頑張る（後書き）

『クラス職業』

ファンタジーには必須な要素。しかしこの幻想世界では僧侶とか神の使いとかが転職させたりするのではなくあくまで自称である。そのため嘘などの可能性もあるが、実際にその職業にあったパーティやクエストが発行されるため失敗して損をするのは嘘つきである。戦士とか盗賊、魔法使いなど、一定の知名度を持ち冒険者達にはある意味必至なクラスの中には専門学校的な物もあり、卒業と同時に己のクラスを証明する物が発行されるらしい。自称なため、時折奇抜なクラス名を見ることもあるが、”時折”でありながらそれは”日常茶飯事”という、やっぱり奇抜である。

・奇抜な例

『鞭使い』

嫌な予感と良い予感を感じる。まだマシなほう

『マスター』

地雷。

騎士、意外とある（前書き）

おい

羽衣狐様が大変なことになったぞ。

騎士、意外とある

「んにゃ……、朝か。」

モゾリと毛布を被った彼が起きあがる。体を伸ばせば体のいたるところよりコキリと軽快な音を鳴らし、彼は欠伸をもらして辺りを見回した。既に灰が積もったたき火の跡を挟んで反対側には暢気そうに勇者がいびきを立て寝ている姿が目に入る。

「外は嫌だよとか良いながら最高に寝てるな、アホらし。」

昨日、王女と魔女が格好云々言い出し馬車の中で寝ることとなった。それに異議を出した、意義というか情けない限りだが勇者は自分は何とか言い出したのを彼は思い出した。尻尾をパタパタをさせ尻尾についた砂埃を取り払う。王女も魔女もとても旅の途中とは思えない格好であるが、二人とも服の汚れを取り払う魔法は使えるという。実に羨ましいことだが、それに非力な女性という件もあった。騎士はあれだ、強いからだ。そういうわけで現代っ子のドキドキ魔獣が住む平原の真ん中でお泊まり会！が始まったのであった、

「ほい、ほい、ほいっと。」

彼は軽く体を伸ばしたあと、すぐ近くにあった大木にまるで猿のごとく飛び乗り駆け上っていく。数十メートルはあるかという巨木だ

が、彼は数秒もたたずに頂上へと上がりきりそのまま東のほうへと目を向けた。反対の西側では星がまだ輝いているころだが、次第に東の空は明るく霞んでいく様子が見えた。太陽が昇ってきている、明るくなるにつれ夜の闇に隠れた雲も次々と姿を現す。

「本日東の方晴天なり。」

見る限り、地平線の彼方まで雨雲らしき大きな雲は一つも無く彼はご機嫌そうに尻尾を振った。その時だが、ご機嫌であった彼を邪魔するがごとく、ふと、彼は近付いてくる気配を感じた。ずっと感じていた気配の正体、というか旅の仲間　勇者パーティということから考えると彼が仲間という話なのだが　である勇者だった。

「なんだ勇者か、早起きだな。」

「こつちの台詞だよ桜花、夜明け見てんの？」

「おめーには関係のないことさ、確かに夜明けを見ているだけだけどねい。」

「ハハハ、何だよソレ………すげえな。」

「何が？」

会話の途中で、勇者の突然の台詞に彼は気になって尋ねた。勇者もまた同じように東に視線を向けている。顔を見せ始めた太陽の、ま

だ淡く夕日のごとく燃えるような光が彼を照らし、勇者の影を作っていた。彼としては見慣れた光景である、いつも見ている夜明けのこの一時。しかし勇者は見たことがないという、彼がそれを知る由は無いのだが。

「夜明けだよ、なんかさ、すげえ………ってね。」

「……お前本当に記憶喪失か？」

彼らとしてはこういう夜明けなど常識の範囲である。知らないはずの勇者から見れば確かに珍しいものだが……、だからこそ彼は思ったのである。一体何と比較してこの夜明けがすごいのか、と。故に尋ねた、ふと考えれば最初っから疑わしいことではあったが……。記憶が無いと言うより”常識だけ”が吹っ飛んでいるような、勇者はそっちのほうがりやすい行動をしていたのだ。

「……時が来たら話すよ。」

「すっげえダセえなその台詞、言っつて恥ずかしくないの、ケツケツケ。」

「言った直後に後悔したわ。」

「まあぶつちやけお前の状態とかどうでもいいんだけどね。」

「………」

勇者はふいに口を閉ざす。そんな勇者を、何か空気が変わったのを感じた彼ではあるが、とうに興味も失せ視線を地平線の彼方へと向けた。太陽の光がまさしく燃えるように、そんな比喻が出てくるほど赤く大平原の草木草花を色づけ、遠くの果てに見える獣の群もまたそんな太陽に感謝するように歩いていった。空の青と、太陽の赤が混ざり合い微かな紫を作り出す色の情景は、所詮色の変化であったが、勇者には何よりも尊いものに見えた。

「あのだ。」

「何？」

「次の街って、いつごろつくのかな。」

「一番近い街……というか泊まれる村なら後半日、お前の目的である巡礼地は村から林道を通ってもう1日って所だ、順調にいけるならな。まあそりゃ無理だろうから着くなら三日後って所。この辺りは強い魔獣もいないし、例えばぐれドラゴンがいようと撃退なら可能だ、何を深く考える？」

「ドラゴン、って……撃退出来るかどうかはおいといて怖エよ。…それにしても巡礼か。」

「深く考えるな勇者、これはお前の旅でもあるが俺たちの旅でもあるんだ。」

「……そうだな。」

「フン。」

こいつもう知らね、と言いたげに尻尾を一回と振る彼をなぜかムカツクのだが妙にいい笑顔で見る勇者は、今日もいい日でありますように、と姿を完全に現した丸い太陽に向かったそつと呟いた。そのすぐ後にガタンと物音がしたかと思うと体を伸ばしながらこつちへと歩いてくる王女の姿があった。

「おはようございますなのですタケル様！……あとオマケの駄狐エ。」

「ははは、おはようエルリア。」

王女の物言いに苦笑する勇者と、駄狐扱いされた彼は不機嫌な顔を隠さずに耳をピョコピョコさせる。彼はとくに挨拶を返すわけでもなく、王女と一緒に寝ていた（エロくない）魔女が未だに起きてこないことについて尋ねた。

「魔女っ子は？」

「マニラでしたらまだ眠ってるのです、すごい顔で。」

「なんちゅー余計な一言を、朝弱いのか…。」

ある意味イメージ通りだな、と勇者の言葉の後側でそう思っていた狐耳の彼だった。魔法という不思議パワーを使う人はだいたい、何

故か体力不足というか研究人のせいも基本的に彷徨かない。例え馬車でギツタンギツタン（エロくない）揺らされていたとしても、日光とか色々な要素が体力を又ル又ル削っていくのだろう。勇者を言葉に笑いながら、王女は辺りをキョロキョロし、そうしたかと思うと居るはずの者がいないせいか、王女はそれについて尋ねた。

「クリステイとジーニアスはどこいったのです？」

「あれ？そういえば二人は……？」

「ジーニアスは森、クリスは水浴びだ。」

「（二人は名前で呼ぶんだな……。）」

魔女のことは、妙にぶつかることもあつてか”魔女っ子”と呼ぶ。魔法少女と呼ばないあたりが実に正しいことだが、だからといって魔女っ子というのもまた不思議なものだと勇者は思った。ただ、自分が未だに一度も名前を呼ばれたことがないためか勇者はそれを思い出し思わず顔をしかめた。その表情を、わかってるぜ、と言いたげにウンウン頷きながら口を開いた。勇者の行動など彼には全てお見通しだったのだ。

「なにか不満げだなクソ勇者、わかってるぜ、川まで案内してやるぞ。」

「……へえ、勇者様？そんなことはもちろん」

「いや、勘弁してくれ。……怖いしそもそも違うから。」

勇者がチラッと横を見れば”ゴゴゴゴゴゴ”という謎の威圧感を出しながら、真つ黒に染まった王女がそこにいた。ツインテールがまるで威嚇するヘビの如くうねる様、まさしく氾濫した黄河である。もともと黄河とか言っただって勇者にしか理解出来ないであろう。彼は内心で、燃えろ、とか思いながらも乳繰り合う二人を見ては口を開く。

「つまらん、違うのか……お、帰ってきた。」

「……………ただいま、朝ご飯。」

再び籠を背負って現れたのは暗殺者であった。果物や山菜を中心としたものがギッシリと籠の中に詰まっていた。美味しく食べて余れば村や町で売るといふ実に素晴らしい行為である。そういえば、と勇者が口を開く。暗殺者は細長い耳をピクリと動かし勇者を見た。無表情で感情がよくわからない、しかし暗蒼色の不思議な皮膚と合わさって妙に魅力的な金色の眼に見つめられた勇者は思わず顔を赤くし目を背けた。ゴホン、と咳払いして勇者は言う。

「いつごろ森に入っていたんだ？」

「……………何分？」

「30分前ちよいだな。」

「えっ。」

「なにそれこわいのです。」

30分で子供一人がスッポリと入りそうな籠に、一杯になるまで野菜やら果物やらを詰め込む存在がどこにしようか、いやいるまい。やはりファンタジーだぜ、と勇者は思わず明日の方向を見ながらそう思った。

「……………マニラ。」

「まだ寝てるのです。」

「……………クリス。」

「水浴びだよ。」

「……………ん。」

「（会話が薄いッッ！）」

なんてこつたい！と勇者は思わず体をねじった。突然に奇怪な行動をとった勇者に対しては、さすがの王女も驚きを隠せず何かの病気かと勘違いをし、彼にいたっては生暖かい目でやさしく見守るだけだった。

「ただいま戻り……なんでしょうかこの空気は。」

「……………おかえり。」

その後彼らは勇者に対して、暖かい目を送りながら魔女がおきてくるのを待つのであった。ちなみに、これは蛇足だが騎士が帰ってきたとき勇者は、さあ出発だ、とやる気を出して馬車で絶賛睡眠中の魔女に突貫、再びなんともえない叫び声がこだましたという。勇者の勇気ある行動で目を覚ました魔女を確認して、さてと、と彼は馬車の馬に乗り続くように仲間達も馬車へと乗り込む。最初の朝日を越えて今日も旅は始まった。

『ゲルドレー林道』

勇者の最初の目的地、中心に位置するミドルアークより南に位置する自治区『メルディーナ』はその林道を越えた先にある。林道の入り口付近には貿易が盛んな小さな町があり、勇者達は1日そこで休憩を取り、林道へと至るための準備を始めるのだった。

先にある自治区メルディーナはよくある工業都市の一つであり金属加工……主に武器に関しては世界随一を誇る。といっても極一部にはそれを越える武器を作る存在もいるが、都市全体という考えからするとメルディーナに軍配が上がるだろう。武器に関しては進んでいるため、冒険者や武器商人の姿はミドルアークよりも多い。ギルドの大きな支部も存在しており経済は極めて好、ただし荒くれ者などが多いのもまた事実である。

「ハアツ、ハアツ、ハアツ、……てやあ!!」

「甘いですよタケル殿。」

「何いッ!? つてうわあ!?!」

「これで0勝27敗目ね。」

「クリステイもつと手加減するのです!」

「いや訓練だからダメだろ。」

林道へと至ろうとする町の一角にて、騎士と勇者は木剣であるが、剣を交えていた。というのもも全て勇者の訓練のためである。先日一件で、思ったより勇者が体力があることがわかったため 本人は何故か否定しているが 体力づくりをすつぽかして実戦形式で体に叩き込もうという作戦に出たのである。訓練が面倒だから実戦形式、これが異世界クオリティ。

「(悔しい! ……けど手加減されちゃうッ!)」

ビクンビクン、と木剣で散々叩き付けられた影響で体のいたる所が震えている。勇者自身も実に当たり前のことだとわかってはいるが、女性である騎士にフルボッコにされ、あまつさえ”もつと手加減しろ”なんて言葉まで出る始末、世の中上手くいかないものである。

「ですが才能はありますよ、もっと自信をもっと下さいタケル殿。」

「そ、そうかな、ハハハ。」

「俺様とはまだ訓練出来ねえーな。」

「どうしてなのですか？」

「死んじゃうよーん。」

「それって訓練じゃないのです……。。」

武器の都合上、彼の一撃は即死級の破壊力を持つ。変幻自在に柄や頭部の大きさが変わる代物だが、その上限は彼自身もよくわからないらしい。ただ、驚くことに人間の数十倍もの体躯の魔獣を丸ごと地面に叩き付けるほどの大きさに変えて彼は戦うという。それを振り回す見た目10歳の狐オプシヨン完備の男の娘、実にロマンティックが上がっている。

なにはともわれ、そういうわけで例え木製の槌を使おうにも今の勇者には受け身の取り方も不十分、それ以下であるため下手をしたら木っ端微塵の大喝采間違いない。剣と格闘、体の強化を中心とした魔法の会得まで、彼との訓練は無さそうである。勇者は安心したような不安なような、そんな不思議な感情を抱いた。

「魔法の基本は理解よ、しっかりと学びなさい研究しなさい頭に叩き込みなさい。」

「わけわかんねエ……。」

そしていざ憧れの魔法の勉強に至ると、今までの憧れが全て吹き飛ばほどの勉強会である。属性の話はわかるが、魔力なんたらオドとマナなんたら、理解に構築出現神秘虎之穴とまずそこから理解出来ない勇者脳である、もっと頑張つて欲しいものだ。

「お腹空いた……。」

「もう？まだ序章って感じなんだけど。」

「へへ、勘弁してほしいぜ！」

「はいはい。」

キリッ、と笑顔で言う勇者に興味も無さそうに淡々と返す魔女。そんな二人をプラプラと尻尾を揺らしながら見ている彼は、

「……夫婦かよ。」

と軽く呟いた。妻夫漫才とでも言いたいのか、あながち間違つてもいないが勇者と魔女の組み合わせはなかなか珍しいことである。勇者を観察してもみても、剣や格闘の訓練より魔法のほうがやる気があるように見えたのだ。更に驚くことに、勇者は記憶喪失らしいのだが最低限どころか、下手をするとどこかの”教育機関”に所属し

ていた可能性が出てくるほどの教養っぷりを見せていた。最初文字を見たとき妙に頭を捻っていたが…、と彼はそこまで考えたが、わかる通りそれは全て正しい。

まあいいか、と彼は手を頭の後に回してゴロンと寝転がり目を瞑った。ただの記憶喪失ではないことは間違いない、聞く気もないし、話すまで待つということもしない。それが今の彼の思考だった。

「……嫌な予感がしたのです！」

「……………？」

彼の呟きに反応したのか、彼と王女との距離はかなり離れているはずだが……、とりあえず何かが王女を突き動かした。キュピーンと新しいタイプにでも覚醒したのか、その勘は凄まじいものである。特に何もなかったが…。もやもやした何かをまといながら買出し組みの王女と暗殺者は、勇者が体から脳までなじられている一角へと戻ってきた。

「姫様おかりなさい。ちゃんと買えましたか？」

「もちろんなのです！……でも香辛料とかはかなり限られてたのです、残念なのですよ。」

「こんなところで塩が手にはいるだけでも御の字さ、あーやだやだ、これだから王宮ぐらしは。」

「うぬう。」

「（海なんかねーのに塩かー？）」

「お前の巡礼地であるメルディーナの近くに海があるんだ、その付近の町から交易してんのさ。」

さつきから塩塩と、人間が生きていくのに必要な塩が森林地帯で普通に手にはいることに疑問ありまくりの勇者であったが、勇者の疑問に満ちた表情に気付いた彼は無知だねー、と言いながらも勇者に説明する。

「なるほどなー、メルディーナってどういう場所なんだ？」

「勇者の最初の巡礼地よ、鍛冶の町で有名ね。」

「巡礼地……正確にはメルディーナの一角にある神殿ですが、そこにはかつて最初の勇者が使ったという神具が封印されているそうですよ？」

「え？マジで？」

「マジなのですよ。」

何気にテンション上がってきた勇者である。初代勇者、その上神具、ここまで脳味噌を揺さぶるワードは他にはないだろう。ただ、勇者には一つ気になることがあった。

「いるそう”って、実際どうなの？」

「偉い人と宗教人がそう言ってんだよ、事実無根の詳細不明ってな。」

「まあそういうことなのですけど。」

「ああはいそうですか…。」

今回の勇者のテンションの上下つぷりは見物である。彼は浮き沈みの激しい勇者を見て、結構な頻度であるが、旅に参加したことを後悔し始めてきた。そもそも、これは彼本人しか知らないことだが”勇者の旅”に彼自身が参加するのは極めておかしいことであつただ。

「（魔王を倒す武器の神具が、ね……。覚悟を決めるよクソ勇者。）

彼は目を瞑り瞑想を始めた。故郷を思い、かつてを思い、今を過ごす。力なくしおれた尻尾が何を現すのだろうか。彼は腰元に括り付けられた白銀色の金鎚を撫でながら思考を続けた。勇者がその光景を見ていることに気付かずに……。

『勇者八明日モ頑張ルヨウデス』

騎士、意外とある（後書き）

『ウォル・ハンマー
魔槌士』

まつついし、火力が命の脳筋野郎、かと思えば案外教養はある。魔法とハンマーを組み合わせて戦うパーティの火力担当である。名乗る人物はかなり少なく、鍛冶士といったハンマーに関係するクラスからの転向が主流。しかし魔法と組み合わせるといっても精々ハンマーに雷を纏わせたりとするのだけである、が単純な火力は魔法を越えるだろう。城壁や攻城兵器、完全武装兵を破壊したりと活躍の度合いは高い。狐は主に炎の属性を使い粉碎する、大きさが変わる金鎚と組み合わせさって凶悪極まりない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8397o/>

異世界の狐

2010年12月4日04時47分発行